



イワタカンアオイ

1、2025年度作業報告－1

2025年度は11月4日から植生回復作業を開始しました。近年の温暖化に伴い葦毛湿原でも秋の花の開花が遅れています。作業開始時点では、イワショウブ、ホソバリンドウ、ウメバチソウ、ヤマラッキョウの開花が続いている状態でした。湿原中心部には開花している植物があるので、11月は周辺部分を中心にメリケンカルカヤ等の外来種の駆除を行い、12月に入ってから本格的な植生回復作業を始めました。

1) I 地点西（ミズゴケ除去実験）

I 地点西では、ヒメミミカキグサが自生する地点のすぐ北側で木道沿いにあるミズゴケの山（島状部）を除去する作業を行いました。ミズゴケの山は直径約4m、高さは50cmほどありました。マツ等の灌木が数本生えていますが、いずれも低木の若木です（上段左写



作業**前**のミズゴケの山（2025年9月6日）



作業**中**の状況（2025年11月25日）



ミズゴケとその下の黒色土（2025年11月27日）



ミズゴケ除去作業（2025年12月3日）

真)。ミズゴケは手作業で除去したところ、下に黒色土が堆積しているのが確認できました（前頁下段写真）。黒色土は5～10 cmの厚さで堆積しており、その下は細かなチャートの礫が固くしまった地層で、直下のミミカキグサ類が多く自生しているところと同じ地層です。前頁下段写真はミズゴケと黒色土を除去しているところと地層の堆積状況です。上段左写真の左下には礫が見え、この礫の間と直上の土が堆積したところにミミカキグサが自生しています。島状部の堆積物の下半には黒色土、上半にはミズゴケがあります。

ミズゴケの山より上流側にはヌマガヤが自生していた部分があり、ここでは黒色土が厚く堆積していました。この黒色土はすべて除去するのではなく、一定量を残しているのでチャートの礫層の上に黒色土が薄く堆積している状態です。このように実験区の中も均一でなく、様々なわずかに異なった環境になるようにしています。



作業後（南から：2026年1月8日）

作業後（北から：2026年1月8日）



ミズゴケ蒔き出し実験区：西から（2025年1月20日） 黒色土蒔き出し実験区：北西から

除去したミズゴケと黒色土には埋土種子が含まれている可能性があります。この両者には異なった種子があると予想されるので、ミズゴケを除去した実験区と木道を挟んだ反対側の斜面で、水が供給されやすいところに植物の発芽を確認するための蒔き出し実験区を2か所設定しました（下段写真）。ミズゴケにはムカシヤンマのヤゴが生息している可能性があるため、すぐ下の湿地部分に逃げ込める位置に置きました。黒色土は斜面のやや高い位置で、水が湧き出して湿地状になっているところに置きました。

この実験は各地層に埋土種子としてどのような植物が残っているのかを確認し、できる限り多くの埋土種子を活用するための基礎資料とするための実験です。土壌シードバンクの堆積層には時間とともに変化した**植生変化の歴史**が残されているはずです。

2) D地点(防鹿ネット内)

D地点の防鹿ネット内には絶滅寸前になっているコバノトンボソウが自生しています。今回の作業は日照を確保するための除草作業です。

右上段写真の画面奥がコバノトンボソウの自生地点で、この部分の除草を行いました。右中段写真奥の黒くなっているところです。

D地点中央部はシラタマホシクサの群落になっていますが、このままにすると、日照不足になり来春の発芽が阻害されるので、今後、残りの部分についても除草する予定です。

ネット内にシカは入らなくなりましたが、ノカンゾウはなかなか増えてきません。ノカンゾウの再生にはもう少し時間がかかりそうです。



D地点作業前(2025年8月14日)



D地点作業前(2026年1月25日)

3) R地点(冬水田んぼの再生)

R地点は旧水田部分で、
去年は冬水田んぼとして小

さな池を作りました。夏にはミゾソバが繁茂し、水面が1/5ほどに小さくなりました(下左写真)。現在は冬ですが、緑色をした藻類と思われる植物が池の底に広がっています(下



R地点作業前(北から:2025年9月3日)



R地点作業後(南西から2026年1月25日)

右写真)。

今年は昨年作った池の下流側に小さな池を作りました。まだ、水を入れた直後なので生物は見られませんが、上の池と同様に、春にはカワムツ等の魚や水生昆虫が見られるようになると思います(下左写真：奥に昨年造った池がある)。

池の下段では除草を行いました(下右写真)。この部分を含め、旧水田部分では春の植物の発芽のために全面的に除草を行っています。



新しく作った池(2026年1月25日)



池の下段除草後(2026年1月25日)

4) O地点

O地点はイヌノハナヒゲを根から除去して、地表面を薄く水が覆う裸地状態の湿地を維持しているところです。今年は実験区の南側(画面奥左側)にあるイソノキが弱ってきました。水分が足りないようなので、南側の一部のイヌノハナヒゲの除去をやめて、裸地化しないことにしました。

今年も7・8月はほとんど雨が降らず、O地点では食虫植物であるミミカキグサやトウカイコモウセンゴケはほとんど見られませんでした。今冬の12月・1月もほとんど雨が降らず、水源である設楽ダムの貯水量が減り豊橋市では節水制限をしています。

葦毛湿原も水量が減って乾燥しています。温暖化による気候変動の影響と思われますが、葦毛湿原での保全活動だけで解決できる問題ではありません。過去の環境を参考にすることは重要なことですが、現在の環境を調べてどんな問題があるのかを把握した上で、未来の環境を予測して、湿原の保護を考えていく必要があると思います。



O地点作業前(2025年9月3日)



O地点作業後(2026年1月25日)